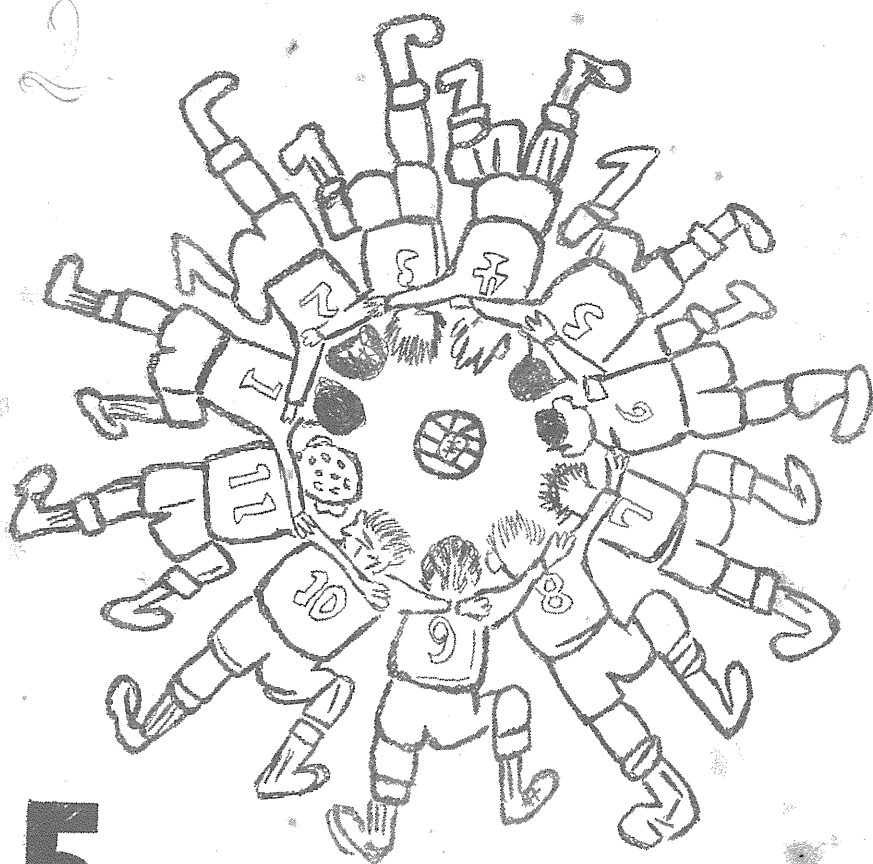


DANH



5

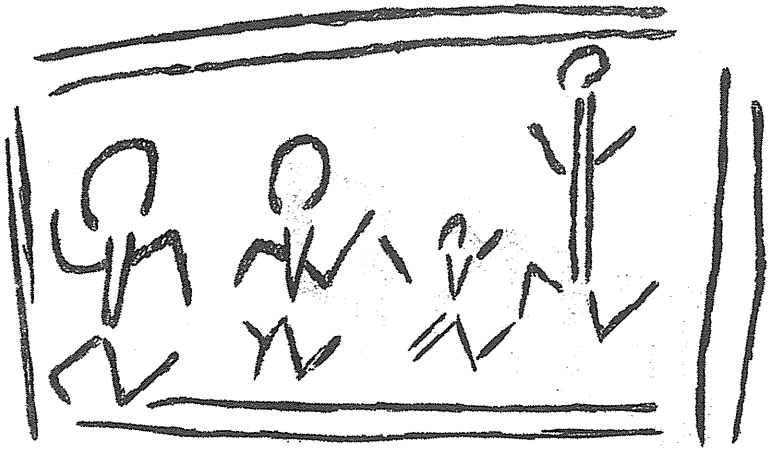
栄光学園蹴球部

7期～12期

EIKO

SOCCER

1959.3



目次

蹴球部のタイマツ	3
部員ニュース	5
第37回インター杯神奈川県予選	6
インター杯予選に拾う	11
4年連続決勝進出を喜ぶ	12
県下中学校冬季選手権大会	15
中三万才	18
汗と埃と泥と — 中学生の作文	20
雑談	25
一橋大学サッカー部活動	28
丹沢紀行	30
新人戦	35
新役員紹介	37
蹴球技術の向上の為に	38
昭和33年度全成績表	46
編集後記	48

蹴球部のタイムツ

九期生 田畑哲也

雨が降っていた。

冷い雨が降っていた。

所は県営サッカー場。

時は十一月三十日。

全国高校サッカー大会、神奈川

県予選の決勝戦であった。

この骨の髄まで氷るような雨の

中で、栄光と鎌倉学園のイレブン

が神奈川県征覇を目指して相争っ

ていた。

強敵鎌倉学園に対し栄光のイレ

ブンは愚命に戦っていた。ある者

は徹底的にねばり、ある者は強烈

なアタックをかまし、ある者は根

限りタッシュした。

雨、雨、雨

烈しい雨であった。

氷のような雨であった。

あの日も雨であった。台風の影

響がすさまじい雨であった。夏休

みの終り八月二十七日。国体県予

選や三回戦対Y校。所も同じこの

県営サッカー場であった。選手は
十一人ちよつきり、応援わずか二
名、みじめに敗れて1-7。

あの時の篤さんの声は今も耳に
残っている。「君達が何故サッカ
ーをやるか？又何故試合に勝たね
ばならぬのか？」

確かに、あの当時、俺達高校部
員はサッカーに対する意義、それ
を失って、いやそれを忘れていた。
無気力な、何のフアイトもない
何の意欲も持たない練習が俺達を
待っていた。

そう確か運動会の頃であったが
新しい意欲が部の内部に起ってき
たのは。自らの反省と全国大会に
対する力強い希望は、高校部員を
して、魅力ある高校々を目指して
の再スタートを産んだ。

しだいに、しだいに、サッカー

部という大きな歯車はその回転を始めた。

一回転二回転そして三回転……。ぐるぐると力強く、さらに真赤に火花を放ちながら歯車はまわった。苦しい練習であった。辛い練習であった。ある時は部員内部に不信を生じた。又ある時は自分自身に対する不信も生じた。しかし、一度まわり始めた歯車はたゞその勢をますのみであった。全員が全員がうちりとまとまり、全員が全員苦しみ頑張りそして進んだ。こうして昨年と同じようにして全国大会に臨み、次々と相手を下し、遂に決勝まで進出した。汗と泥とほこりの果に得た物は神奈川県二位であり、鎌倉学園に対する〇―12の敗戦であった。

確かに県下三年連続征覇は成ら

なかった。勿論全国大会出場も成らなかった。しかしあの敗戦は決して無意味な物ではない。形式的には敗戦であったとしても、ある面から見るならばそれは勝利であろう。輝しき勝利であろう。栄光サッカー部の一人／＼が共に苦しみ、頑張り、一人一人が若々しく困難に対決し雄々しく戦って得た勝利、形式的には敗戦であったとしてもそこに含まれている物、それは勝利でなくて何であるうか。

サッカーと云う物、それを只単なる遊びとして視、それを遊びとしてあっかうべきか。それとも真のスポーツとして扱うべきか。何の苦勞もせず、只遊びだけをサッカーに求めるべきか。

フランスの哲人「アラン」はこ

う云っている。

「耐えしのぶのではなくて自らすすんでする。これが愉快な物の本質である。しかし砂糖菓子はお口の中で溶かしさえすれば別に何をしなくても旨いものだから、多くの人とはそれと同じ幸福を味わおうとして失敗した。」

蹴球部員として真なる楽しみ、幸福をサッカーから得ようとするのなら、サッカーを意義ある物として高めようとするなら、苦しみを避けてはならない。困難に対して戦わなければならない。辛いことだ、苦しいことだ。しかしそこには先人が同じように苦しみ戦い、歓喜を秘めながら一歩一歩進んだ跡があるはずだ。俺達も頑張るのだ。常に前進するのだ。一時向の停滞は一日の退歩を示すのだ。敗

戦を勝利とし勝利をより高い勝利に引き上げる為頑張るのだ。

篤さんの作った自分の好きな詩の一節。

未完成な者なるが故に

決して止まる事を知らず

見下す事も知らぬ者、

ひたすら上に上に、頭をもたげて、

歯を食いしばって休まず、

絶えず高きへあこがれよ！

王者への道はそう遠くはないだろう。

その昔、アフリカの父と呼ばれ、現地人の中に投げたりピンクストーン博士が死の直前、同じ探検家スタンレーに送った言葉としてこんな言葉がある。

「あゝわしの手からダイヤモンドが落ちる。スタンレーよ、このダイヤモンドを受けついでくれ。そして更に高く揚げよ。」

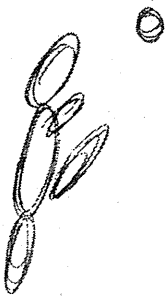
ある時は強く、ある時は弱く、ある時は歓喜にあふれ、ある時は悲しみにふるえ、ある時はファイトに燃えた蹴球部のダイヤモンド。

常に周囲に大なる影響を与え、常にその火を絶やさなかった蹴球部のダイヤモンド。

燃やそう

強く更に強く。

明るく、更に明るく。



部員ニュース

去年も例年通りいろいろな所で英語弁論大会が行われ、栄光からは中学高校あわせて六つの大会に出場六人とも入賞したが、この英弁においても蹴球部員の活躍は目ざましく、六人のうち三人は蹴球部員であった。

まず上智大学で行れた全関東大会に高三の東郷さんが出場、見事優勝。又読売ホールで行れた高松宮杯全日本大会では、中三の松田君が全国から集まった精鋭の中で六位に入賞。更に鎌倉の横浜国立大学教養学部で行れた神奈川県大会には、中三の太田君が二位に入賞した。

第37回

インター杯

神奈川県予選

一回戦 対 茅ヶ崎高

十一月九日（於県営）

栄光 3
1 1 2 2 茅ヶ崎

国体予選に敗れた後、このインター杯予選を目指して練習に励んできただけに、全員の意気はすこく、この試合でも非常にファイトがあった。

前半始まってすぐCF大泉に絶好のパスが渡り、ゴール前までドリブルして強いシュートをしたが、球は左へそれ絶好のチャンスを失った。しかし、その後すぐに同じような縦パスをLW菅沢が取り、二三歩ドリブルしてシュート。見事にゴールを破り、待望の先取点を挙げる。更にその後得た三本目

のコーナーを、大泉が巧みなヘッティングシュートで加点した。栄光がコーナーから得点したのは珍しい。一方バックのコンビもよく、たいした乱れもなく前半は2-10で終る。

後半に入って茅ヶ崎は恐い先輩に言われたらしく、猛烈に突っこんできた。しかし、栄光は敵の強いロングシュートに救われ、フオワードは更に激しい攻囲を見せ、左からのCF大泉のシュートが大きくバウンドするところをRW堀谷が飛び込んで一点を加えた。その後栄光は茅ヶ崎の縦パスと鋭い突っ込みを警戒しすぎ、ハーフがさがりすぎ中盤がガラ空きとなり、敵ハーフにもち込まれる事が多くなった。そして二十分頃、LWからLW更にRWにノントラップの

遅いパスをまわされ、オフサイドのR.I.にクラウンターのシュートを決められてしまった。これは明らかにラインズマンの怠慢であった。その後もしばしばピンチを招いたが、好調のL.I.内山の快足やC.H.佐伯の体でおしまくるフラインプレーに救われた。しかし、三十分敵コーナーを見事なフッシュで決められ、苦しくなった。が、

栄光は残り時間もわずかなのでバックスはタツチに蹴りだし、フォワードは左から精力的に攻め、逃げ込みの策戦に出た。この策戦が成功しろー2のスコアーをもって終了のホイッスルが鳴った。

前半にあれほど素晴らしい攻撃を見せたフォワードが後半になって動きがぶくなったのは、前半の縦パスの多用ではなからうか。縦

二回戦 対相洋戦

十一月十六日（於湘南）

栄光 4 1 1 0
3 1 0 0 相洋

相洋は栄光の苦手であり苦戦を予想されたが、栄光全員にフアイトがあり、前半十五分をのぞき栄光のペースで試合は運ばれ、完勝であった。

試合開始後十五分位の向は、両チーム一進一退の試合を進め両チームとも得点できなかった。十五分栄光はL.I.加藤からチャンスボールが上り、RW山田R.I.田代が

突っ込んで一点を先取する。この頃から栄光は調子に乗り押しつけるが得点に結びつかない。又、栄光守備陣もガッチリ守り大きなキックで相手にチャンスを与えなかった。そして、二十五分敵ゴール正面ペナルティーエリアの少し外側でフリーキックを得たが、得点とならず前半は1-0で終る。

後半は相手が栄光のペースにまき込まれた形で、栄光の一方的な優勢のうちに試合は運ばれた。まず五分L.W.菅沢からのパスをC.F.大泉落ちついて決め、十五分にはRW山田がハーフからのパスをミサドリフルしてシュートを決めた。更に二十五分にはインナーからのバックパスを受けたL.H.佐々木が、絶好のシュートを決め、計三点を後半にたたきこんだ。そし

て、バックもよく守り、GKが球を一度もさわらない程だった。

三回戦(準々決勝)

対県鎌戦

十一月二十三日(於県営)

栄光 6
4 1 0
2 1 0
0 県鎌

得点こそ六点入ったが、後半の始めを除いては活気のない試合で凡戦だった。

二時半栄光のキックオフで試合は開始された。試合開始よりずっと栄光押しまくるが得点に結びつかない。又春のリーグ戦の経過を繰り返すへこの時は相手が八人で栄光はさんざん押しまくったが、得点なく0-0の引分けとなった。このでないかと思われたが、前半二十分位に大泉がゴール前の混戦か

ら、ゴール右隅に絶妙なシュートを決めまず一点先取する。後も、もた／＼した試合だったが、L加藤のシュートで一点を加え前半を終る。

後半に入るとどうしたはずみか急に調子をだし、開始後二十分間に四点も入ってしまった。即ち、L加藤のドリブルシュート二本、RW塩谷、LW菅沢の中距離シュートで、どれも別人とも思われるようなすばらしいシュートだった。しかし、その後は又活気がなくなり、攻め続けたが得点する事ができず、結局0-0で栄光の勝利となった。

準決勝 対慶応高戦

十一月二十九日(於県営)

栄光 2
2 1 0
0 1 0
0 慶応

くしくも準決勝で慶応と当る事になった。と云うのは、昨年も準決勝で慶応と当たったのだ。土曜日で学校からバスで行ったのも同じだ。違うのはメンバーと試合内容であった。

強豪小田原を倒してでてきた慶応に対し、栄光は素晴らしいフアイトで当り、対県鎌戦に引きかえ非常に良い試合だった。

前半の始め栄光フオワードは素晴らしいフアイトで慶応を圧倒し、二十五分位の向ひた押しに押しつづけ、これならいけると思われたがシュートが弱く得点に至らなかった。そして、どうした事かフアイトが少しなくなり、逆におさされた。バックがいくら球を蹴ってもみな敵に取られてしまい、全く苦戦であった。しかしバックス

の健闘により辛くも切りぬけ、前半は終った。

後半に入ると栄光フォワード前の調子を取り戻し、再三チャンスをつかえたがものに出まない。前半と同じ経過をたどるのではないかと危ぶまれたが、8分フォワードからH佐々木にパスが回され中距離シュートがGKの頭を越え待望の一点をあげた。活気づいた栄光は更に十二分相手バックのGKへのバックパスに乗じて、RW塩谷が無人ゴールヘシュートを決めた。その後、バックスでRB宇佐美、RH石原、H佐々木とつる者が続出し、フォワードをさげての戦いは栄光に不利に展開し危い場面もあったが、GK林の好守備とCH佐伯の大活躍により辛くも無得点におさえ、決勝進出となっ

た。明日の相手は、希望丘に5-1で勝った鎌学と決まった。

いよいよ決勝だ!! 優勝は我々の手で(いや足で一勝ち取ろう。そして更に前進しよう。

EVER ONWARD!!

決勝 対 鎌学 戦

十二月三十日 (於 県営)

西関東代表戦出場ならず!

栄光 0 { 0 1 1 } 2 鎌学
0 1 1

決勝戦にふさわしい好天気といいたいところだが、この日は猛烈な雨が降りクランドコンデイションは最悪に近い状態だった。その上準決勝までの土のクランドと違い、今日の芝生のクランドは非常にゴロの球足が速くやりにくかつ

た。

一時半キックオフで試合は開始されたが、クランドが悪いため栄光パスが通らず開始早々押される。鎌学は両ウインクがよく開き、逆サイにまわしての速攻と地在這う柳なパス、更にサイドハーフを使うバックパスを混えたうまい戦法で、やはり鎌学は強いという感じだった。それに対し、栄光もフアイト充分に戦ったが何か落着きがなく、足が地面についていないような感じで、いたずらなプレーを繰り返していた。鎌学はさかんに攻めてくるが滑ってころんだりするのに救われ、又バックスも頭張り0-0のまま、試合は進んだが、二十分ペナルティを取られ、遂に一点を先取されてしまった。その後一進一退の攻防をつづけたが得

点にならず、1-0のまゝ前半を終る。

後半に入り栄光は一段とファイトを燃してあたったが、鎌学のうまいパスとロンタキックに完全にかきまわされてしまった。そして十分中央からRWへパスが渡り、少しドリアルしてから見事な中高シュートを決められ、二点目左許した。しかし栄光はひるむことなく、直後にCF大泉が独走しあわや得点のチャンス左むかえたが惜しくもシュートがはずれてしまった。そしてこの頃からグランドは水たまりだらけのひどいコンディションとなり、キック力に優る鎌学は細いパスは不利と見てロンタキック戦法に出、栄光は防戦一方となり再三ゴールはおびやかされるようになった。しかしこの猛

攻も相手シュートの失敗と、GK林の好守備に救われ一点も許さなかった。最後の十分間栄光猛烈なファイトを燃やし、全力を尽して戦ったがついに及ばずタイムアップの笛がなってしまった。

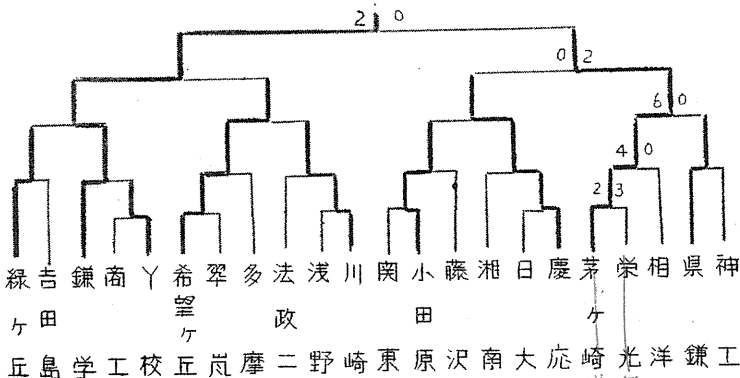
今日の試合は負けたとは言え、更に気持の良い試合であった。皆ファイト充分によくやった。試合に負けたという感じがしない。RH石原CH佐伯も足の負傷にかかわらず、よくあれだけやった。敗因は体力とキックの差であろう。何しろ鎌学の体力は翌日の新聞に出ていた板にすごかった。高二最後の公式戦にふさわしい決勝戦であった。

インター杯予選組合せ

優勝 鎌倉学園

メンバー

GK 林 美山
RB 宇佐 山
LB 内 原
RH 石 伯
CH 佐 田
LH 飯 谷
RW 塩 田
RI 大
CF 加
LI 菅
LW 藤 沢



○厄日

一回戦対茅ヶ崎高校戦で奇妙な事があつた。この時は後半に一点

差につめられ苦しんだ試合だつた

が、高二の〇〇氏残り時間もわず

かになりバックスが一点差を守ろ

うと、タツチへ大きく蹴り出すの

を見て淡い顔。そしてフォワード

の〇〇氏がシュ

ートを失敗した

のを見て、今度

は恐い顔でにらみつけた。タイム

アツスの笛がなつてみんなが喜ん

でいるのを見て不思議そうに其に

尋ね、勝つたと聞いて大喜び。何

を勘違いしたかろゝ2なのに2ー

2だと思つていたという、又、こ

の日久しぶりに出場した△〇氏R

Wをやつたが、以前のポジション

がLWであつたため、右と左を両

違え試合中LWのつもりでいたといふ。この日は主脳部の厄日であつた。

○甘太郎二伯の腹

高校の試合を見に来た中二のう

ちでも特に――〇×君、帰りに甘

太郎屋に入った。入つたはいいが

、体に比例して胃も小さいと見え

ている絵が書いてある、「下痢腹

痛にワカマツ」と

つた。

二個で降参。甘太郎二伯の腹とは

大食のサッカー部員の両では珍ら

しい存在である。後日高一の中で

も大食漢でなる〇〇氏は、あれなら

十個は食えるとオツシマイミタ。

○「下痢腹痛にワカマツ」

甘太郎の事でもう一つ。二回戦

終了後例の甘太郎屋に入つた口〇

君×個食い、店を出たが後が大変

腹が痛くなつてしまつた。大船で電車を一台乗り過ごそうとしたが無理をして皆と一箱に乗ることにした。さて電車に乗つたには乗つ

たが相変らず腹をおさえて唸り続

け。そして唸つていたところが、

なんと口〇君と同じ様な格好をし

ている絵が書いてある、「下痢腹

痛にワカマツ」と

つた。

〇タフシーのメーター

藤沢駅から県営グラウンドにタク

シーで行く時は、入口の前の店よ

り十m手前で停めないとカチャリ

といく。これを知らないためチー

日目に見事にやられてしまつた。

「ここでもいいです。」シュー。カチ

ヤリ。「一四〇円。」

インクマー杯予選に拾ふ



四年連続決勝進出を喜ぶ

四期生

永島

暢

昨年（昭和33年）高校が決勝に進出したと聞いた時は、おどろきもしたが嬉れしかった。僕も三回戦まで勝った事は知っていた。準決勝には慶応が小田原でこれには駄目だろうと言われているのでなおさらの事だ。

後で加藤に会った時「すごいじゃないか。」と言った所「たいした事ありません。」いや謙遜／＼、仲々大変だったに違いない。一回も試合を見に行けなかったが、さぞかし一生懸命だった事だろう。

昨年高校生と一緒に合宿をした時、今年は随分骨が折れるだろうと思った皆が一生懸命やっている事は判るのだが、後一っ粘りが欠けていた。技術の未熟はしかたがない。少しの年数しかやっていないのだもの。だがそれを補う何物かを持ってもらいたかった。しかし、秋のこの事は僕を一度に嬉れし

くさせてしまった。彼等も先輩に負けずに頑張っているのだと言う事が良く判った。

四年前僕が高三の時に初めて決勝に進出した。それまでどうしても勝てなかった。準決勝で二回とも小田原に負けてしまった。二回目は1-0だった。

三年生の秋、全国大会神奈川県予選で栄光は順調に勝ち進んだ。準決勝の対茅ヶ崎戦では小松が骨折、二、三ヶ月の重傷だった。延長戦で3-2で勝ったが、この時はすぐ嬉れなかった。明日勝てば甲府へ行くと言うので皆興奮していたようだった。三年の連中は行くべきかどうか等話しあった。決勝は関東学院とであった。泉頭（早大）はこの試合に出なかった。が前の日は眠むれなかった相だ。応援はサッカー部初まって以来の大人数で、ヘルベック先生以下三十人程であった。

キックオフ直後、僕のコーナーキックをR佐々木（東大）がシュートして先取点を上げたので、これはいけるかなと思ったが、逆転される1-1で涙を飲んだ。だがどう見てもそのころの栄光は優

勝ちチームとは思えなかった。この時のキヤプテンは川喜田（防大）。三年生は佐野（上智）と僕が出場した。

二年目の年は大活躍だった。東日本大会では堂々オチビを得た。エイコーニユースフラッシュには次の様に書いてある。

波瀾万丈蹴球部大活躍

「東日本で四位獲得」

これが一面のトッポ、しかもワ段にもサッカー記事が出ているのだから新聞部も余程なまげたに違いない。

秋の全国大会では相当余裕を持って決勝へ進んだ。決勝は希望ヶ丘とであつた。栄光滑り出し良く着々点を重ねていったが、その後相手に1点差まで迫られた。その内LB矢板、希望ヶ丘のセンターフォワードがあまりにきたないチャージするので腰にすえかね相手の横面をひっぱたいたのは驚いた。観衆には何だか判らなかつたが、レフリーにペナルティーを取られた。ここでいれられれば同点だからさうなる所だが、秋栗原（早大）「当時キヤプテン」

はヘツチャラでシュートをはじき出した。これで栄光元気が出て延長に入ったが、3点追加6-3で優勝した。その後山梨県代表を破りついに西関東代表になった。勿論学校中大騒ぎだった。サッカー部の連中の得意顔が思われる。

三年生は川喜田、細島、二年生は栗原、中村、岩田（上智）佐々木（裕）石原（学習院）、矢板、渡名喜（上智）一年生は佐々木（民）生駒、篠塚、栗田、東郷、小川、金沢、伊橋、奥田等。この連中が活躍していたのだが、どれもこれも一くせありげな奴等ばかりだ。

この時のゴールキーパー栗原は独走してまわられてもしも恐くないと言っていた。それ程好調だったのだろう。

西宮へ行くと言うので練習もしたし寄附も集めた。神奈川新聞も大きく扱って呉れた。その記事の中に、三回戦あたりで会うであろう藤枝東高とどの位やるかと県蹴球界では期待している等と大変だった。

応援を兼ねて大阪見物に行つた。我々卒業生、

浅羽（東大）、三田（一橋）泉頭（永島（上智）も見ていた。その外に予選で大活躍した川喜田、編島も夜行でかけつけて来た。学校が大学入試のため彼等が希望したにもかかわらず出場を禁止したので、出場出来なかった。この二人が出ればもっと良い試合が出来たと思つたのは彼等二人だけではなかった。僕達も皆そう思つたのである。昔も今も変らぬは学校だけだ。試合は上野商工に5-1で軽く惜敗したまあよい／＼。チャンスは後いくらでもあるのだから、これまでの奮闘は見事だった。

第三年目は佐々木（民）を初め七期生を中心としたチームだった。彼等は六期生の花やかな活躍の影にかくれて大変損な立場だった。夏までの成績はあまりパツトせず、夏の合宿は昨年とくらべて相当見劣りがした。三年生も殆ど参加しているのだが、中心はないのでそれ程熱はなかった。

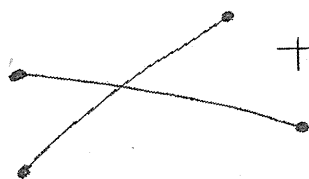
合宿直後の東日本大会では、一回戦で睦星に当り残念ながら敗れてしまった。昨年のメンバーとあまり変りがなかったのに、この結果は主力のレベルの違いであらう。

所が秋の大会では見事優勝したのでからたいたしものだ。この四年間で一番実力が発揮出来た年ではなかったらうか。この時も一回も試合を見に行けなかったが、とにかく勝つんだと言う心構えが見られた。特に佐々木（民）の奮闘が見事だった。西関東代表決定戦の為甲府へ行つたが、敗れても悔いはなかっただろう。勝つんだ／＼と思つて実際に勝てればこんな楽しい事はないに違いない。そして四年目は決勝で鎌学に2-0で敗れた。鎌学はムラが少なくまとまっていた相で、穴が少ないと言われていたから栄光が敗れたのも無理はない。大活躍をした後の二、三年はそれ以上の活躍はおろか普通の活躍も難かしいのだからこまでやつたのは上出来だろう。以上を振り返って見るといづれもキャプテン及びそれに協力するものが一生懸命だった事である。川喜田、栗原、佐々木（民）加藤いづれも大奮闘だった。石原、がんばれ。

僕が高三の時、石原、田畑、田代、大泉等はまだ中一、サッカー部員のホヤホヤ、それがもう部の中心だ。この調子で行くと今の中学生もすぐに高校の中心になるだろう。そしていつかは前以上の活躍をしてみたいものだ。そうして後三三年のうちに実現するのではないかと思つている。

栄光 ファイト！

県下中学校冬季選手権大会



十期生 宮杉 武
佐藤 晃一
太田 茂

第一回戦不戦勝

第二回戦 対浦島丘中

十二月二十五日（於県営）

栄光 5
3 1 0
浦島丘中 0

今日の試合の相手は予想通り浦中であった。十二時二〇分丁度試合は始られ、開始直後からよく攻めたが栄光全体にフアイトがなく、すぐに押し返されてしまうようだった。十分頃から全体に調子が出てきて、RW小沢のパスをL工佐藤受け先取点をとった。これから後は全体に自信がついてずつと攻め続け、十六分頃LW松田がクリーンシュートを決め2-0とリードした。そしてますます調子

に乗り攻め続けたが、結局点が入らず前半を終了した。

後半に入って五分頃CF市村がシュートをきめ、その後も栄光のペースで試合は進められ、更に十五分頃佐藤が四点目を決めた。このあたりからFWの動きがなくなり攻め立てられ始めた。そして栄光はしばしばピンチに襲われ、特にコーナーキックをヘッティンクされた時は、ほとんどだめかと思った程であった。FWの動きは鈍く、特に左からばかり攻めていたので、浦中のバックスも左にかたまってしまった。しかしLW松田が最後の点を入れ、5-0の楽勝に終わった。

明日の相手は又も予想どおり一中である。今度の試合こそコテンコテンに勝とう。

準決勝 対藤沢一中

十二月二十七日（於県営）

栄光					
2					
0	1	0	1		1
0	1	1	1		
0	0		1	0	
— 藤沢中					

昨年二連敗、そして今年の夏季大会とこのところ一中には三連敗している。で今度こそはという気持で栄光イレファンはこの試合に全力を注いでいった。それが通じてか、栄光は前半ほとんど敵陣で試合をすゝめていった。

しかしちよつとこのところで決めた手なく、このまゝ前半が終つてしまふかと思われたが、前半終了間際、CF市村の右コーナーからのコーナーキックが絶好となつてゴール前上るところをしい佐藤が右す

みに決めて先ず一点先取した。

後半になつて一中は我然盛り返し、開始まもなくコーナーキックがこぼれるところ敵CFが慎重にゴールをねらつて一点ばんかいしてタイにもちこんだ。

このあたり栄光は一瞬色を失つたが、序々にもり返し、延長にもちこんだ。

延長前半栄光トスに勝つて凡上をとり、この五分に勝負を決めるべく、一気に敵陣に攻めこんだ。そしてすぐゴール前の混戦からRW小沢が激しく突込んで待望の二点目を上げた。

それから栄光の後半の五分も守りとうしてとうとうこゝに一中を破り、合せて一時同後の決勝進出が決つたのである。

決勝 対白山中

十二月二十七日（於県営）

栄光					
1					
0	1	0	0	0	0
0	1	1	1	0	
0	0	0	0	0	
— 白山中					

だいが日も西へ傾いた三時二十分、白山のキック、オフで試合開始。一中戦の後のオニ試合なので皆つかれている為かあまりファイトがない。それでも栄光凡上に陣取つて激しく白山を攻めつける。よくせめるのだがあと一步の押しが足りない感じでじれつたい。前半十五分ごろから白山が攻めてきた。栄光はタツと落ち着いた。フレイでなんなくこれを防ぐ。こんな風な経過でだらだら前半終了。ハーフタイムに上級生、先輩に激励

されて翹びだした後半もどうもフ
 アイトがない。風下なので白山が
 前半よりもツツと押してきた感じ
 がする。どうしても点が入らない
 全くのシーソーゲームでついに0
 -0のまま延長戦に突入。松田が
 例のジャンケンでぬけ／＼しくも
 勝ったので有利な風上に陣取る。
 肉始のホイッスルと同時に栄光は
 猛烈な勢いで白山ゴールに攻めよ
 った。前半三分、LW松田がゴー
 ル前の混戦からシュート。キーパ
 ー取ったかに見えたが、はじいて
 ライン上に球が点々とするところ
 CF市村が必死につっこんで遊に
 待望の先取点成る。皆この一点で
 急にフアイトがでたがそのまゝ延
 長戦の後半に入る。今度は風下、
 みんなクツと下って必死にゴール
 を守る。けれども白山フアイトな

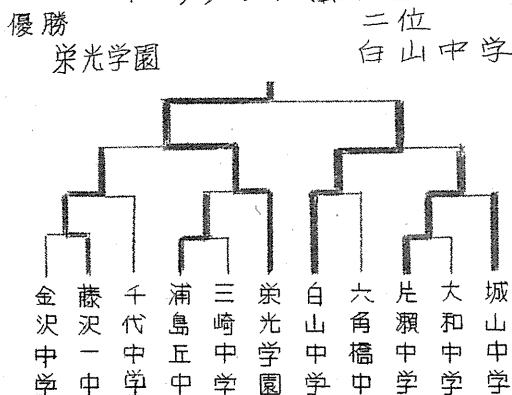
く、返って栄光が攻め始めた。R
 W小沢の惜しいシュートもあった
 が、得点ならず、遂に終了のホイ
 ッスル、みんなだき合つて喜んだ。
 優勝だ、とうとう優勝した。上級
 生達が観迎ゲートをつくつて迎え
 てくれた。本当によかった。今ま
 での苦しさをお忘れて西の空を見る
 と夕暮に紫色の富士山、伊豆、丹
 沢の山々がはるかに僕達を祝福し
 ているようだった。
 しばらくして表彰式があった。
 もらったメダルをみんなにくばる
 と、それをもらったモリちゃん例
 の顔をしきりにエンフアサイズし
 て感激する。みんなニコニコ、本
 当によかった。
 ◎キヤノン、先輩、上級生、そ
 の外応援にいらして下さった方々

《Member》

GK 唯野
 FB { 大石 町田
 新井 矢島
 太田 富野
 HB 林
 大久保
 FW { 小沢
 宮村
 市村
 佐藤
 藤田
 SB 阿部、木下
 清水

へ。ありがとうございました!!

県下中学校冬季 トーナメント組合せ



中三万才

十期生 松田 京司

我がサツカー部に於て我々中三の占める地位は相当なものである。

数が多い上に、個人々々の質が優れている。その中三が、部内の品位と教養の向上に大いに貢献していると言ふ事は否定する事の出来ない事実である。そこでこれから、先輩諸兄又、中一中二の可愛い弟共にその優秀なる顔ぶれと、模範的に練習前の一シーンを紹介しよう。

午後一時半、冬とは思えない程の暖い日光がサン／＼とふりそいでいます。昼のお弁当を食べたばかりで、非常に眠気を催すその頃、グラウンドの片隅では、何やら

気狂いじみた声がします。どうやら、市村、町田、林、清水、唯野の悪童連の声らしいです。守ちやんへ矢島へに歌を歌わせようと、一生懸命です。ところが守ちやんもオインレとは歌いません。市村町田「最初のところだけ歌って呉れ」ば後はわかつているんだ」林「アイナメのような口でニタツ」清水「出だしのところだよ」守ちやん「ワレハフクロウ、タノシキ……」一同笑いをこらえて、唯野「それからあと何だつけ」守ちやん「ツトメハタシ、ココロサヤカ……」どうやらうまくいった様子です。

ゴール前では、残りの連中がサカンに、ボールを足に当てようと空しい努力を続けています。太石が素晴らしいスピードでボールにつきまづきながらドリアルをしています。大久保が飛び出しました。二人はぶつかりました。ボールはコロコロと木下の足元へ、木下「いくぞ」阿部ががまえました。木下シュート。ボールは見事ゴールをよけて、ユーカリの木にぶつかりました。木下「オレマダナ」阿部「トロイヨ」木下「ナニオ」二人は、ガツプリ組み合いました。サツカトならぬ相撲で勝負を決しようというのです。そこへ太田が飛んで出て、二人のオシリをピシヤピシヤたたきました。他の皆も、太田にならってサツトウしました。こうなったら誰をたういているの

か、誰にたゞかされているのかわか

りません。下になった着は災難です。宮杉がつぶれてしまいました。大久保は例のLPのレコードを78回転でかけた板な超早口でしゃべっています。「イテエナ」という言葉がやっとわかりました。こうなると、いつも要領の悪いのは富野です。一番やられて、一人もぶてない有様です。それでいて性もこりもなくやって来るんですから。大石が下の方でクシヤミ一発、近藤がそれを横目でジロリ。彼の目付けは百万ドルです。あの目で見られると、思わず財布の所在を確かめなくなるほです。中前が起き上ってニヒルな表情でいいました。「ドンタラネ、コノタイド。」彼は東北弁のエキスパートです。なにしろ東北人よりうまいんです

から。

皆が、やっと起き上ってフウフウ言っている時、向うから佐藤がかけて来ました。といたいいのですが、ユツクリ、ユツクリ歩いて来ました。彼はおそいのです。何から何まで。早いのはごはんを食べる事だけです。小沢が小声で歌っています。耳をすませてお聞きなさい、「港町十三番地」です。彼は歌謡曲を歌わせたら一番です。ウィクターから専風をすゝめられたのですが、彼の偉大なる教養がじゃまをして、それは断ったそうです。カラウンドの外では、新井がマスクをして寂しそうに立っています。そうでしょう、楽しい練習が出来ないのですから。彼は、十二月以来カゼの引っ放しで、いつまで続くかわからないそうです。

又、太田と、宮杉が何か言い合っ

ています。太田が宮杉のオナカが出張っていると言ったのが原因のようです。皆は二人が粗み合わないかと見えています。そこへ田畑さんが来ました。「ピー、中三練習始めよう。」皆はシブ／＼丸くなつて体操を始めました。

彼等は皆、良い若者です。将来の日本いや世界にとつて重要な人物となるでしょう。元氣一杯、大声をだしてかけて行きます。

さて皆さん、一人足りないと思いませんか。そうです。松田がいません。どうしたんでしょう。ナニナニ、彼はウルチ大明神に呼ばれて地下室の掃除をさせられています。あゝキツト又、イタズラをしでかしたんでしょう。

汗と埃と泥と

中学生

蹴球部の生活

二期生 多田 勝 彰

僕が蹴球部に入ってからもう一年と二カ月位たった。一年も前は球が足に当たってくれて球を蹴るのではなくさわっているようであったが、今ではその反対と言いたい所だがなか／＼うまくはいかない。又蹴球をやっているとやりたくない時とやりたい時がじゅんぐりに来るらしく、二ミカ月前なんか全々やる気がしないですいぶんサボった。そして上り坂になつてきたら盲腸のお説教、トサカにまちゃ

った。今はただぐり坂。この前の火曜日(二月十三日)なんか大変寒かった。ごっさあんがヘッドしようとして転び、顔はどろだらけ。パンツは真黒。僕だって芸術的な顔を造ったり、センターでトラッふしたりしてさん／＼だった。その時サボッタのが東平と吉川。けしからん野郎どもだ。その練習の時僕は下着の着替えを持ってこなかった。帰りはしうがないからYシャツと制服の二枚。早く帰ろうと思つてバスを待っているとなか／＼こない。二十分位たつたらやっと来た。その向はもうが

ダブル。おかけで次の日は水鼻がタラタラ。

今僕が一番つまらなく思っているのは、中二の部員が少ない事。十人しかいない。だけど久保ちんを又入れれば十一人でそろう。しかし後三、四人は入ってほしい。そしてやるんだつたら大いに楽しむ事である。しかしその度を越さないように練習していきたいと思つている。今のバックは鈴木、太久保、後藤、宮坂、田島、吉川がいるが、フォワードは東平、僕、江刺、北村、榎本とちよつと力不足の枠に感じる。だからもつとも

つと頑張つていきたい。そしてもつともつと楽しい部生活を送つていきたいと思う。

蹴球部に入部して

十一期生 宮坂研一

栄光に入つて始めて「サッカーとか云うスポーツがあるらしい」と気がついた。そして一学期のスポーツ大会に出て、「これは素晴らしいかもしれないスポーツだ。」と思つた。そこで二学期仮入部がゆるされた時、毎に「サッカー部に入りたい。」と言つたが、「無理だからやめなさい。」と言われてしまい、バレー部に入ることにした。簡単にあきらめたのは小学校の時ばかりなどひきやすく、一カ月に三日は休んでいたほど体が弱かつたからだ。

けれども担任の村田先生は、「蹴球部に入りなさい。」と言われた。ようやくと体もじようぶになつて来たし、先生も強くすゝめられるので、とうとう入つてしまった。入部してから、「おもしろくてよい部だ。」と思つたが、始めて部室を見た時「うわーきたねー。」と言いそうになつたほど、ごみぐごちやごちやしていた。

なんだかわからずに、ボカスカボールをうつついたり、おしたりの練習をやつた。始めのうちはただ何となく土曜日によつて来て、だまゝ練習して帰つて行くうだつた。そのうちにみんなとも親しくなつて、コーチに文句を言つたり、試合のまね事したりするようになった。それがとても楽しかつた。今ではもうそんな事で

はつまらなくなつて、コンビとか何とかしゃれた事をやっている。でも僕はハーフなので、なかなかコンビの中に入れずつまらない。とにかくバレー部などに入らずサッカー部に入つてよかつたと思う。これからしっかりと練習して、強いチームになりたい。

サッカー部に入つて

十一期生 石井弘志

僕が、そもそもサッカー部に入つたと云う事は、サッカーが面白いからである。

毎週土曜日になつて授業がすむと、部室へ行つて持物を置き、外ランドへ行く。そして体操をしてから外ランドのまわりを四、五回かけて練習に入る。最初のうちはやるのはいやだと思つていた事も

棄に出るようになった。そしてこれらの技術がだんだん上産して一人前になる日も近い。そしていまには、他校とも試合が出来るようになるだろう。全国大会の出場を夢にかけながら、練習を終えて波静かな長浦湾をながめながら家路につく。この時の気持には、なんともしえない物がひそんでいる。寂な気がする。

サッカー

十期生 町田 晶生

サッカー。何と響きの良い言葉だろう。そして、何とフェアで活発なスポーツであろう。僕はサッカーが紳士的で、男らしく、審判に決してさからってはいけないというルールがあるので、大好きである。欧米ではサッカーが人々

の間に広く普及しており、誰でもサッカーを理解し、楽しんでいとか。そして、ちよつとした所には、必ず青々とした芝生のタランドがあるとか。まことにうらやましい限りである。日本でも野球のように広く普及したらどんなに楽しいことになるだろうか。仕事や勉強のあい間に、外へ出て、ボールを蹴り、ポジションを決めてゲームをする。考えただけでも楽しい。

サッカーは割に技術が高等なのか、野球やバスケットなどの球技が一応上手にこなせる人でも、最初にボールを蹴る時には足の動きがとてもしころなく、ぶざまな格好で吹き出さずにはおれない。この前、先生と中二の試合があったが、中二の方は部員がメンバーな

のでともかくとして、先生方は初めてやる方が断然多いので、その格好のぶざまな事、非常に傑作だった。とても筆で表わせるような事ではない。そのゲームは試合的興味は一つもなかったが、先生方の奇好な格好でしじゅう笑い通しだった。中でも傑作なのは、川端先生である。「タツス。タツス。」と、さかんに張り切っておられ、ボールと高くボールが上ってきたので、勢いよくヘッドインタをしようとなさった。だがボールを見ないで頭だけ前に出したので、つんのめるような形になり、ボールは頭に当たると思いきや、背中に当たってしまい見事に後にはね返った。先生例の通り首をかしげて、頭左かいておられた。又、組長(富田先生)は大きな体をゆすって大い

に奮闘されたが、葉山トン平君の
スライディングに見事にひつかか
って、ふとつた体がドシンとトン
平君の上にのっかってしまった。
後でトン平君白く「組長て、重て
えなあ。」

他の先生も皆、愉快な格好をして
楽しまれたようだった。

とにかく、サッカーは広いトラ
ンドを縦横無尽にかけまわって、
一汗流す。どんなに下手な人でも
楽しむ事ができる健康なスポーツ
である。まあ欠点と言えば、体力
が必要なので病身の人や年配の人
には、ちよつと無理だという位の
ものだろう。

しかし、見ているだけでも、広
いランドを動きまわるスピード
が十分にあり、スピード狂と言わ
れる現代人によくマッチしたスポ

ーツであろう。特に高級な試合に
なればなる程、ボールの動きが早
くなり、見ていてめまぐるしいほ
どである。

今まで、くどくどとサッカーの
賞賛をしたが、それでもまだ足り
ない程で、とにかく若さと健康に
あふれたタイナミックなスポーツ
である。日本でももつとく普及
して、誰でもがサッカーが出来る
と云うようになって欲しいものだ。

蹴球部の二年間

十期生 小 沢 進

入学当時ぼくは、この学校で、
何か一つ運動を通して、自分を鍛
えていこうと考えた。

そこで選んだのが野球部だった。
しかし、野球部の入部が認められ
るのは二年からで、いちはやく蹴

球部に入部した佐藤、松田から部
活動の様子、部内の雰囲気を知り
たり、又彼等に何度も勧められる
に至って、「蹴球部に入ろう。」
という気持が強くなり、遂に、二
学期の末、一抹の不安を抱きなが
ら仮入部した。

その頃の蹴球部は、高校が東日
本大会で四位、中学が県下大会優
勝と全盛を誇っていたので、部員
もはりきっており、練習も厳しか
った。入部して大分、部の空気に
慣れてくると、部の正史を知り、
成立以来の先輩の苦労、努力を感
じ始め、時にはぼく等と一語に球
を蹴って楽しむ彼等に、尊敬の気
持さえ持つようになった。そして
部員の和というものが、他の部に
優るとも劣らない事に大変満足し
た練習中に強い球を脳天に受けて

は痛い思いをし、激しいランニングにへばっては指導の人に怒鳴られた時等、『辛いなあ。』と感ずる事が度々あった。しかし、その反面雨の日の練習や、寒い時の練習には楽しい事が沢山あった。そして練習を一日も休まない事をよくの自慢とし、毎土曜日を楽しみながら一年を過ごした。

二年になると、新しい部員が入部し、練習日も火曜日と土曜日の二回になった。

そして、はやくも二学期には、栄光のBチームとして数々の試合に出場するに至った。

ところが、この教試合に活躍したばかりは、大分天狗になつてしまい、練習態度も不真面になり、時にはさぼる日さえ出てきた。こんな墮落けた部生活が一年間も続い

た為、フアイトや粘りが失せたのは勿論の事、実力までが、二年から入部した人達より劣つてしまつた。この事に気付いたのが二年の春休みの事だった。それから真面目にやったものの、市村、佐藤、松田等は、もう相当の段階に行つており、実力の差は以外に大きかつた。そして立ち直れないまま、夏季大会に臨み、自分の自信のないプレーから、チームが二位に甘んじてしまつた。

この時、『表面の派手な活躍に酔つて、いい加減なプレーをしていると、実力が落ちてしまふ。実際に通用するのは実力である。実力があれば、何ものであるうとも恐れるに足りない。』と云う事を痛切に感じ、又、良い経験をしたと思つた。それから冬季大会を目

標に、焦る事なく基礎練習をみっちりやり直し、実力をつける事に専念した。又、少しでも球に馴染む為、毎日、放課後になると蹴球グラウンドに行つた。そのお蔭で、一年の時の勇気をふるい起こさせ、実力みなと対等になり、ボールコントロールは人一倍ついた。だんだん大会が近づくにつれて、グラウンドに出てくる人数も増してきた。

そして、チーム全体に活気がみなぎつて、大会に於いては、フアイトと和で一中に夏の雪辱をすると共に、優勝を栄光学園中学蹴球部に齎したのであつた。この大会に於て、自信に満ちた落着いたプレーは自分の実力を十分に出しきり、僕に大きな喜びを与えた。この喜びを最後に、僕は栄光蹴球部生活にピリオドを打つたのである。終り

雑談

泉頭 篤二

△

山に登る人は、登頂し、下山するに用する一切の食料、装備を背負う事を、まさか「否」とはいわないでしょう。凍死、墜死といった至命的結果が疑もなく待ちかまえているからです。高校生特に

その上級学年の部員はちようと、この重い荷物を背負って急な上り道を登る登山家のようなものです。たゞ、死が個人から部に変るだけです。こゝに言う急な上り道とは彼等自身の練習、試合、合宿などを意味します。重い荷物とは、指導です。これを放り出して、ガ

ムシヤラに登頂をめざしても、無事に帰ってくるか、それは保証のかぎりではありません。もつとも、荷物の中からうまい食い物がたくさんでてくるかどうか保証は出来ない、がね。

△

指導の最終目的は、自分より、優秀なものを作る事だと思ふが、多段式ロケットの様なもんだ部というのは、オ一段ロケットが飛ぶ事の出来る高度がたとえ、知れたものであつても、オ二段ロケットが、それ以上の高さ迄飛んでくれなにも不足はない。

△

指導で最も神経を使つてもらいたいののは、全ての偏見、不平等を排除してほしい事である。僕も、

この点に注意には注意を重ねて努力してみたけれど完全には出来なかった。しかし、上手な人、本当に真面目に努力している人、スラッ状態にある人、努力の足りぬ人等在一切の潛入感と偏見を捨てて見つめる態度が是非とも必要です。指導される立場に立つてみれば、一番解りやすい事です。下級生の正義感、向上心、楽しさを指導者が殺さぬ様細心の注意が必要です。

△

話題を変えて昔話を二つ。皆僕の至談。今じゃ、九万円の部費の中に運動会等で買われる売店

の利益があらかじめ割合に應じて入っているそうだが、自分達が頑張ればそれだけ部の収入になった、自衛競争の時代の話。僕達が、高校二年の時の運動会にアイスクリーム、ジュース、サイダーをサッカー部で売ったが、我々四期生は商人根性に徹して、大いにチエをしぼった次第だ。例えば、アイスクリーム売場はどこがいゝか、水左飲みに乗る連中に皆アイスクリームを買わせようというわけで例の水道の横におミセを開いたり、広告にアイスクリーム一ケ二十五円と書いておいて、それを斜線で消して、その下に二十円と書く。こうすればサッカー部の奴安くしたな、サービスがいゝじやないでな調子で皆満足そうな様子で買ってくれるだろうと考えた。元々二十

円のものだこっちは損もしてないし勿論オキヤクサマ、サービスなんぞ考えた事なんぞこれっぽっちもなかった。根性に徹した我々は一人のサンドウィッチ、マンを大勢の父兄と校長やら何やらおエラ方の前で走らせる事にした。アイスクリームとジュースの宣伝文句を大きな紙に書いて、腹と背中につけ百米コースをゆつくりと走らせた。この奇抜な飛び入りに父兄、表裏はさんやの喝采。しかし、サンドウィッチマンその時少しもあわてず、堂々と走り続けた。諸君！諸君はこの寂な立派な先輩を持つている事に誇りを持たねばならぬぞよ！その男を一目でも見たいと思わぬかや？みたいか。よろしい名前だけ教えておこう。その名は泉頭 篤一。

△
もう一つの話。合宿でいつも話してしまおうか、どうしようか迷っている話、そして恥しくていっもやめてしまふ僕の思ひ出話。……今年の合宿の時まで、オアズケ。

△
部に写真係がないのは惜しいと思う。この向創立五週年の時に、随分方々からエガを借りてきたけれど、それでも、学生サツカト五年史にする迄に至らなかったのが残念でした。つくぐ写真にとつて置けば良かったと思われる出来事がたくさんあったのです。フィルムは部が出す。その他の費用も部が出して出来たものは部で保存する。そうしておけば、次の十周年には素晴らしい写真展が出来るの

ですがね。我々の時代からみるとはるかに高額の部費を学校からもらっているのだから、それ位の出支が部活動の重要な活動の妨げになるとは思わない。田代新会計さん、どうでしょうか。又部員の中から一人でも二人でもカメラマンが出てくれませんかね。

△

今迄のサッカー部の先輩は三十を教える。今年も新OBを迎える事はうれしい事だ。しかし、反面OB会が確固たる組織を持っていない不愛も隠せない。面白い事に、OBの有難みなど殆んど知らない三・四期の人達がよく部を訪れてくれ、OBというものを良しにつけ、悪しにつけ経験したそれ以下のOBは比較的サボっている。色々特殊な事情もあるだろうが

問題がある。OBの方を今問題にする必要はない。こゝで、考えてみたいのは現役のOBに対する態度である。例えば、去年の六月に現役を引退してやろうとOBが意気負い込んだら、高校は試合に行つた後だった。又、土曜日だからと思つてケランドへ行くと人っ子一人居なかつたりした事を僕は二度経験した。試合が変更して、見物に行くこと約束しておいた連中にすら、何ら通知がなかった。こうした場合OBがどんなに腹立たしきや、味気のなさを感ずるか想像してほしい。色々なOBがいる。

一年に一度位しか顔を出さぬ人もいるし、一ヶ月に一度の人もいる。しかし、皆OBであり、疑もなく古巣を訪れたのである。疑もなく諸君の顔を見たかったのである。

。粗末な、冷淡な態度を取つてはならない。ちよつとした心使いが不必要な誤解、ミゾを防ぐ。僕はOBがどうしても諸君には必要だと思ふし、諸君もそれを期待している事を知っている。従つて、ファミリー、オア、サッカーが増々充実する事を望んでいる一人だ。この問題は深刻ではないが、深刻になる可能性を含んでいる。



一橋の巻



四期生

三田達也

一橋大学のサッカー部は、現在
関東大学リーグの二部の第四位に
居ります。私が一年の時は、同じ
二部のビリから二番目、二年の時
はビリから三番目、といった所が
こゝ三年間の成績です。

高校ではリーグ戦よりも全国大
会等の方が重視される様ですが、
大学では、特にウチの場合、極端
に云ってリーグ戦によい成績を挙
げれば、他の試合はどうでもよい
といった考え方が一般的です。一
橋大学のサッカー部は戦前は一部
に居た事があつたそうで、我々に
取って「一部復帰」と云う事は非
願であり、従ってリーグ戦に力を
入れるのも、人一倍と云うわけ
です。

サッカー部には毎年何人かの入
部者が居りますが、そのうち、一

人でもサッカーの経験者がいれば
よい方で、ほとんどが全くの素人
ばかりです。この素人達に中学一
年生と同じ様に、フリースキック
から教えて行かねばなりません。
従ってまだ二部のリーグ戦では一
度も優勝した事がなく、一部復帰
と云う夢はとうてい実現しそも
ありません。

リーグ戦以外では、毎年春に新
人戦、三商大戦、国公立戦の三つ
があります。

新人戦とは一年・二年のみが出場
出来る試合で、毎年例では一回
戦で敗ける事になっていきます。

三商大戦とは、神戸商大、大阪市
立大、一橋大の三校でリーグ戦を
行うものです。そしてこのリーグ
戦は、今年東京でやれば翌年は神
戸で更に次の年は東京でという風

に行い、三大学の親睦を計るのが

目的とされています。この三商大

のうち、神戸商大は関西リークの

一部に、大阪市立大は同リーク三

部に属しています。これも毎年の

例は、一位神戸大、二位一橋大、

そして三位大阪立大となってい

ます。

次は国公立戦ですが、これは東京

都内の国公立の大学に依るトーナ

メントで、一橋はこれには毎年か

ならずよい成績を残しています。

特に一昨年はこの大会で優勝しま

した。もつともこの時は、一部校

である教育大学が出場しなかった

為ですが。

今年はまだ学生として最後の年

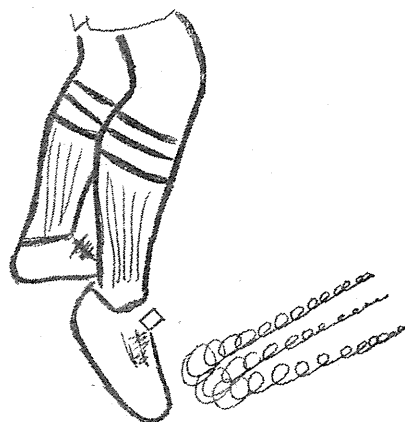
でもあり、一つ大いに張切って、

同じ二部に居る上智大学、防衛大

学等に勝ち、二部で優勝したいと

思っています。

〓終〓



春の河

たっぷりと

春の河は

ながれているのか、

いないのか、

ういている、

わらくずのうごくので

それとしられる。

○ 春の、田舎の

大きな河をみるよろこび

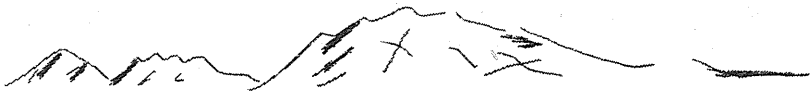
そのよろこびを

ゆったりと雲のように

ほがらかに、

飽かずながして

それをまたよろこんで



丹沢紀行

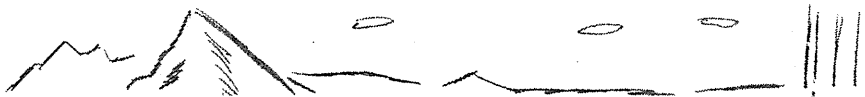
九期生 太前 芳哉

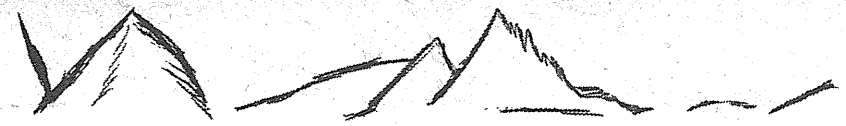
○十二月三十日

朝横浜駅に集合。高一佐藤、飯田、大前中三林、矢島の総勢五名である。他に高一の者が三人いた。列車はすいていて、座つて平塚まで行った。バスに乗り換え荻毛まで行き、いよいよ登り始める。加藤さんと宇佐美さんはもう山小屋にいつているはずだ。荷物は僕のが一番大きい。すぐくつらいい。それでも登らなければならない。とうとう僕が一番びけになってしまった。しかし近道を登りきつた所でみんな待つていてくれた。高一の山岳部の者が僕のリュックを背負ってくれ、僕は軽い彼のをしょった。しばらく登ると道が二つに分れていく所にきた。ここで僕は高一の二人とヤビ

ツ峠にどっちが先につくか競争をした。ところがこの尾根はずっと真直ぐ続いている、フーイー言いながら登ると分れ道にきた。左に行けばヤビツ峠に出るだろうと思つて行くと、とてもない沢に出てしまった。この沢を悪戦苦闘の未下つたら、やっとヤビツ峠に行く道に出た。完全に負けてしまった。ヤビツ峠を下って諸戸で飯を食った。ここを出発する時僕は自分のリュックをしょった。諸戸の木材置場を過ぎると、僕は急にとぼし出した。佐藤がびっくりした。へなにしろ彼は、僕がへばつていると思つていたのである。僕はもう札掛まで懸命にとぼした。その目的は、札掛の橋を渡った所にある赤い屋根の建物であった。

さて小屋に入つてやつとくつろぎ、さつそくみんなのリュックを肩掛けて食糧を



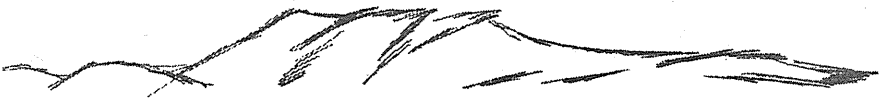


だした。出ること出ること食い切れない程集った。それをどうやら食ってから、水道管の修理をやった。するとそこへ篤さんもやってきた。又一段とにぎやかになった。折から天狗さんも来て、先生は天狗さん、青木先生チエル氏の三人となった。晩飯をみんなで食べた。僕が腕によりをかけて作ったので、皆うまいうまいと言って食べた。夕食後明日の計画を立ててから、みんなでバカッ松をして遊んだ。守ちゃんも遊び方を教えてやると、例の顔でニコニコ笑いがら、知らない奴に教えていたそれ以来彼は花札をやろうと言うと、いつも一番最初に「やろう。」と言った。篤さんと加藤さんは、全然ついていなかった。結局僕が一番勝った。高一の生徒が蹴球部はうるさいとボヤいていた。彼等は明日五時五十九分に出発するそうだ。我々は六時に起床である。今日はもう寝よう。

○十二月三十一日

さあ今日は丹沢山まで行くのだ。身仕度を整えて飯を食い出発した。天気は絶好である。我々は長尾尾根に登る事になっている。ようよう登って行く。苦しい。登山靴が重く感じる。僕の所からおくれ始める。結局僕の歩調にみんなが合わせて行く事にした。しばらく登ると雪があった。喉がかわいていたので雪を食った。ここから僕はもう本当に参り始めた。やっと新大日の出合まで来た。ここから塔ヶ岳に行くのであるが、足がすりだしてしまった。ついにみんなとずい分おくれでしまい、ようやく塔ヶ岳の山頂についた。へ飯田は親切にも僕と一緒に来てくれた。山頂からのながめはまさに天下一品、快晴なので特に素晴らしい。富士山が見える。五合目あたりまで雪をかぶり山頂に雲をいだいている。僕は疲れも忘れてしばし見つけた。蹴球部の諸君よ是非





一度来て見給え。ほんの少し休んだだけで丹沢山に向って出発した。ここまでくるともういけない。足が完全にこたえてしまった。沿ると歩くのだが、靴が重い。本当にくたびれた。前はこんなではなかったのだが。とうとう丹沢山まで一時向もかゝってしまった。さあ食事だ。もりもりくった。おかげがたんなくなっていました。守ちゃんもたんなさうであつた。飯を食い終つてしばらく休んでから、又塔ヶ岳まで戻る。やっとの思いで塔ヶ岳についた。ここから後はくだりだ。新大日の出合から長尾尾根にくだる。途中から急な坂道を下つてケヤキ沢におりた。このくだりでも足がつつてしまった。沢に出たところでオヤツ。冷い水を飲みながらのラスクは大変うまかつた。見上げると、行者岳の急なガレ場と山場が見えた。ここからは気持ちよく沢の水を見ながらくだつた。途中で良い薪がたくさんあつたので、みんなで二三本づつ拾つて小屋まで

運んだ。夕食は汁にかんずめ七個である。あけて見てこんなに食えるのかと思つたが、みんなとにたひらげた。林が最後をはらつた。山行から帰つた後の飯は大変うまい。篤さん白く「これはイヴニク、次はディナー、次はナイト」更に守ちゃん曰く「ミッドナイト」恐るべき食欲である。食器をかたづけした後、佐藤が林の顔めがけてこしようにまいた。そして林は眞赤になつて涙をポロ／＼だした。この顔をもう一回してもらいたいものだ。みんなで歌いながら菓子食つた。それもクランチばかり。腹の調子が変になつた。それからラーメンを食つた。先生方の見ている前でうまい／＼と食つて食べた。先生方は年越しそばを持つてくる金子先生が待ちどしいのだ。うらめしげに、そんなに煮こんだらまずいのなんのと言つていた。ラーメンを食つてからストースを囲んで、歌つたり話をした。先生方の





話はまじめくさつていてつまらないのだが、先生方は愉快そうにしている。折からの雨が雪になった。先生方と居てもつまらないので、みんなで又花札をした。やっぱり僕と守ちやんの組が一番勝った。(守ちやんの顔で終始他の組を圧倒)そのうち金子先生が来た。先生は肉を五十匁とそばを持って来たらしい。へその前に先生方は高二人に、肉二百匁とそばをもらって一緒に食べた。後で青木先生曰く、「これで恩返しをした。さて夜もだん／＼更けてゆく。もう一九五八年も数十分である。ついに十二時一分前。はじめ申し合わせていた通り佐藤と一緒に外へ出た。

○一月一日

十二時三分三十秒すぎについた。佐藤が十二時よりおくれたといつて、スーアー言っていた。目的をはたして、しばらくして寝た。

朝起きたら、飯田が「大前が一人で一人

分のふとんに寝たから、徹夜をした。」と云った。彼に非常にすまないと思った。先生は金子先生とチエルだけで、天狗さんと青木先生は帰られたらしい。今日の朝飯は雑煮である。足りなくなつたし、もう油を愚命にさがしてやつと作ったので、その味も又格別であつた。

今日篤さんが帰る日なので、篤さんのリエックにエネをつめた。これでどうとうチョコレトはなくなつてしまつた。篤さんを諸戸まで送つた。雪はもう二十五センチ近く積つていた。山小屋に帰ると早速飯である。飯を食いつつてから高一の生徒と雪合戦をやろうと云つていたが、結局うやむやになつてしまつた。高一の生徒はどこかに行つてしまつたようだ。晩飯は山の最後の夜なので、腕によりをかけてオラダを作つた。

金子先生も招待しての夕飯である。かんずめは又七個集まつた。食うのがいやになる位食た。しかし、とう／＼何も残らなかつたのは、さすが猛者連である。この後金子先生がパン





をくれたので、又五枚ほど食った。腹がポンポンになつてしまつた。高一の生徒がどこかに行つたまゝ八時頃になつても帰つて来ないので心配して捜索隊を出す事になつたが、結局捜さないですんだ。さて高一の生徒も混じえてのエネ大会である。お菓子
は山ほどあつた紅茶を飲みビスケットを食
いながら、歌を歌つて楽しく最後の夜を過
した。いよいよ明日で小屋ともお別れだ。

○一月二日

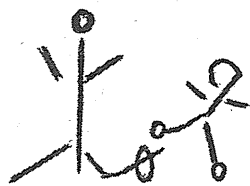
今日は下山である。朝飯を食べてからそ
うじをした。雪はもうやんでいる。加藤さ
んにさそわれてお粗末なソリに乗った。
（このソリはトタンだけと云うシロモノ）
乗つてみて、落されてからびっくりした。
すごいスピードである。ソリから落っこつ
てけがをするのではないかと思われた程だ
つた。

屋食を終ると金子先生は帰られた。雪も
やんでいるので雪合戦をすることにした。

高二の加藤さん中三林、矢島対高一飯田
佐藤、大前である。始める前に大きな雪
ダルマを作つて写真をとつた。その頃は
佐藤が作つただけあつて、見事なもので
あつた。陣地を作つてから戦斗開始。僕
は当てられては損とばかり、陣地に体を
かくして、時々投げつけていた。前に出
ていた佐藤の被雪は真大で目がはれてしま
つた。相変らず僕は隠れて雪の壁に突いた
穴から敵陣を見ると「守ちゃんがものすごい顔を
して、こっちに向つて弾丸を投げつけようとして
いる。あまりすごいので後を向いたら、そ
の瞬間後頭部に痛みを感じた。（後できいた
ところによると、守ちゃんは雪の中に石を入れ
て投げたさうである。石入りの弾丸が雪の壁を
貫通して僕の頭にあたつたらしい。）バスに乗
り遅れては大変とばかり、小屋を出発し戸まで無
我夢中とぼした。諸戸で一休み。かんぱんの配給を
免ける時、守ちゃん曰く「神主は四で我慢する。」
ヤビツ峠についた。四日岡山で過ごした出来事が
目に浮ぶ。山からおりなから山に又くるぞ
と心の内で言つた。

「おはり」

戦 人 新 校 高



九期生 佐藤 茂樹
 “ 大 泉 雄司
 八期生 加藤 陸男



一回戦 対慶応戦

二月八日（於希望ヶ丘）

栄光 3 { 1 1 1 }
 2 1 0 { } 1 慶応

栄光最初ファイトがなく、相手が予想していたよりずっと弱いので、なんだか気抜けした稼だった。しかしボールはいつも慶応陣内にあり、十分頃からは皆落ちついたのかファイトが出て来て、さいざん相手のゴールを襲うが得点にならない。逆に十五分慶応にWからのパスをフォロウして来たCHに見事に決められてしまった。しかし栄光も十七分RW山田がゴール前の混戦からシュートを決め、タイにする。このまゝ栄光押し続けるが得点に至らず、前半を終る。

メンバー

GK 林 美
 RB 宇佐 山
 LB 内 原
 RH 石 畑
 CH 田 田
 LH 飯 中
 RW 山 山
 RI 田 代
 CF 田 泉
 LI 大 藤
 LW 加 澤

後半に入り栄光はファイト充分に相手を完全にのみ、十分にI加藤素晴らしいシュートを決め2-1と逆転。その後しばらくの間攻められ、GK林の苦手とするフラフラシュートがかわりや入りそうになつたが、辛くも逃れ、2-1のまま試合は進んだ。そして二十五分頃RI佐藤がゴール前の混戦からシュートした球がRW山田の方へ出、山田落ちついて決めてだめおしの一点を加えた。この後両チーム得点なくタイムアツクとなる。

二回戦 対県立鎌倉高

二月十五日（於県営）

栄光 6
 $\left\{ \begin{array}{cc} 2 & 1 \\ 4 & 1 \end{array} \right\} 1$ 県鎌
 0

前日の雨でグラウンドは所々大きな水溜りが出来ており、更に一試合とあって土が矛かく非常に悪いコンディションだった。この日はLW山田負傷欠場のためFWガラリとポジションを変えて対戦した。

トスに負けたが瓦上に陣を敷きカランドの悪い方へと攻めた。このため敵カランドの中央、ゴール前そしてサイドの水溜りでパスはとぎれがちになり、球は左から右へと回らず開始後十分間はこれといったチャンスも生れず、県鎌と

互角に渡り合っていた。しかし十分過ぎるころからようやくFW全体にパスが回り始め、二十分頃CF加藤のシュートが敵に当たってゴール前を賑々としていたのを、L工田代の素晴らしい突込みによりゴールし先取点を挙げた。そして更に二十五分RWからのパスをL工田代ゴールして二点を挙げたが終了間際ハンドによるペナルティキックを決められ2-1となり前半を終る。

後半はグラウンドの良い方に攻めたのでFWのパスも前半より通る様になり、かなり楽になった。五分左から右へとゆさぶり、中央に返したのをLW菅沢決める失差とした。更にその後もバックからのパスをCFや両ウィングがゴール前に好パスを送り、LW菅沢が

二本RW佐藤が一本決めて6-1と大きく失差を開けた。その後も再三両方に渡って攻めたが、得点までに至らずそのまゝタイムアップとなった。春から県鎌と四度やっつて三度とも得点が大失点となつたが、何故だろうか。今日はFWの左翼が大活躍でLWとしL工で五失をたゞき込んだ。

準々決勝 対藤沢高校

二月二十一日（於県営）

栄光 0
 $\left\{ \begin{array}{cc} 0 & 0 \\ 0 & 0 \end{array} \right\} 0$ 藤沢
 抽選負

学校の卒業式が終わってからすぐ県営グラウンドへ。時間は大分あり前の試合関東対法政二校の試合を見て、あまりうまくない等と話し

合ったりした。我々は今日の相手はY校だと思っていたのだが、Y校は藤高に負けたと聞き、なあんだという気持ちになった。Y校はこのところ二連敗した相手で、今日こそは雪辱をと意気込んでいたのだが、藤高には全く負けた事がなかった。しかし、このゆるんだ気持ちを持つて対戦した事がまずかった。キックオフ直後この気持ちにつけ込まれ、敵のペースに完全に巻き込まれ、栄光はばら／＼になつてしまった。しかし得点はされず、栄光がこれではいかんというやく引き締まった頃には、相手は栄光の弱点を握つてしまひ、六分四分位で栄光が優勢なうちにも、中盤でちよつとうまいパスを使い逆襲された。後半、栄光は再三の得点チャンス逃した。中にはもうち

よつとというのもあつた。しかし栄光バツクにはそれにも増しての危いピンチが一、二回あつた。敵のシュートが弱かつた為、半ばゴールに入りかけた球をF.B.が外へ蹴り出したり、味方バツクがミスキックをしてその球がゴール前を横ぎり、きわどいところでゴールインせずにすんだりした。延長戦になり、ようやくいつもの栄光になつたが、敵の好守とランドコンデイションが悪くフォワードが思うように動けなかつた為、O.Oのまゝホイッスルが鳴つてしまつた。そして抽選で負けてしまつた。

メンバー

林 美山 畑 中 山
宇 佐 内 石 田 飯 田 泉 飯 田
GK RB LB RH CH LH RW RI CF LL W
戦 三

去る一月二十四日(土)例年通り、中三と高校により来年度の役員(選挙)が行れた。へ投票総数四十二とその結果次の諸氏が選出された。

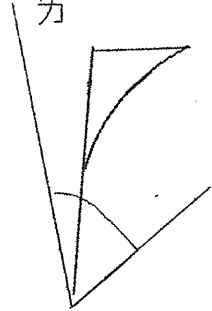
主 将 石原 博(RH)
副主将 田畑哲也(CH)
会 計 田代和生(RI)

この後石原君は「皆に望みたい事は協力をしてほしい」と云う事だ」と又田畑君は「一人一人が自分がいなければ蹴球部が成り立っていない」と云う様な考えでやつてもらいたい。」と挨拶した。

新役員紹介

技術の向上

主将 加藤陸男



サッカーはチームを構成する11人の一人一人が着実に自分のプレイをすれば全体がまとまり、更に全体のまとまりによつて各人の欠点が補われ、そのチームは必ずよい成績をあげる事が出来る。

ここで、各人のプレイについてポジション毎に述べよう。この文は「体育の科学社編体育シリーズ16「サッカーの指導」東京教育大学多和田雄著」から取つたものであるが、この説明は栄光のチームに非常によく当てはまると思つた

ので、特にとりあげた。

まだはつきりしたポジションの決まつていない中一二年生は、これを参考にして、本当に自分にぴつたりしたポジションを選んでもらいたい。又、ポジションが決まつていても、どうプレイしてよいかはつきりわからない者は、ここでそれをはつきりしよう。今まで何度も実際に試合を経験して、そこから、体験として自分の動きを決めている高学年の者は、更にそれをきちんとまとめて再認識する

意味で、目を通そう。

勿論完全に書かれた通りにやる事は難しいし、我々にとつては可能といつてもよいかも知れないしかし、まとまつたチームの建設を目指して、出来る限りこれに近づくように努力しよう。

各ポジションのプレイ

1. センター・フォワード

CFは相手のCHによつてがつ

ちりマークされているのが普通である。特に「スリー・バック」型型防禦では、優秀なCHにマークされるで一試合中手も足も出ないような事があり得る。こんな時、不屈の熱と負けじ魂をもつて、どうにかしてCHを打ちちやる新手を次々に見つけなければならぬ。例えば思い切つたドリブルをするとか、CHを中央からサイドへ誘きよせて、他の味方のために中央を空けて得点の機会を与えとかの工夫である。

CFには大別して二つの型がある。一つは他のプレイヤーが自分の為に働いてくれる事を期待する自己中心型と、もう一つは自分がフォワード線の要になつてフォワード全体をまとめてゆく型である。自己中心型のCFは、足が速く

両足共に猛烈なシュートができなければならぬし、スドリブルの名手であり、特に短い鉛いダツシュをしながら球をコントロールできなければならぬ。

要の役を引受けるCFは、他の味方がつくつた得点のチャンスを確認にものにするばかりでなく、自分でもこれを作り出さなければならぬ。そのためにはポスト。ブレイやスイツチ。ブレイに習熟する外、情況を素早く判断して、少しでも有利な得点の機会を持つてゐる味方に、球を配給してやらなければならない。

「要点」

- (1) 強烈なシュート力を養成する。
- (2) あらゆる角度からシュートできるようにする。
- (3) できるだけ低いシュートの練習をせよ。

習をせよ。

(4) 防禦者なやますためにねばり抜け。

(5) ゴールの下方をねらつてヘツディングシュートを試みよ。

(6) グランドの中央にのみ固定した動きをしてはならない。

(7) 又、片一方のウイングの方向にのみ動くクセをつけてはならない。

※ 采光ではCFは得点者となつてゐる。

2. インサイド・フォワード

(インナー)

IFは攻撃者と防禦陣との連結係として、又ゲーム中に中盤に沢山出る洩れ球を拾うため、少くとも一人はフォワード線より少し下

つた位置に居なければならない。

IFの任務はこれだけではない。

コーナー・キックには攻める場合にも、守る場合にも必ず参加しなければならぬ。又敵ハーフのドリブルに対しては、必ずついてタックルしなければならない。味方のスローインには参加しなければならない。味方インにはこれを防ぐ位置に入らなければならない。

この様にIFはチームの中で、最も激しく動くプレイヤーであるから、肉体的な修練を積まねばならぬ。又、ドリブルの名手でなければならぬ。IFは中盤のあらゆる攻撃・防禦に参加するため、余りポジションに拘束されないで、自分の思うところを走り廻つてかまわない。

「要点」

- (1) あらゆる戦法に精通する。
- (2) パートナーの癖を知りつくす。
- (3) 短距離ダッシュのスピードを高める。
- (4) 力強いシュートの練習。
- (5) 不必要に球にかじりつかないで、有利なところにパスする。
- (6) 相手のサイド・ハーフを追いつめて、途中で止めるような事をしない。

※ 栄光ではIFは、チャンスメイカー

3. ラインズ・フォワード

WFの主な仕事はセンターリングである。出来るだけ早くドリブルして、一般的に反対側のゴールエリアの角の返に球を返さなければならぬ。WFとして特に注意

する第一の事は、常にタッチ・ラインから二・三米離れたポジションをとつて、かけ引の余地をつくる事である。即ち、WFの活動範囲は片側をタッチ・ラインで仕切られていて、敵は必ずフィールドの内側から外側に向つてタックルしに来る。これを切り抜ける為には、内側に切り込むように見せかけて外側に走つたり、或はその反対をやる事によつて相手をだましたり、前に就り出しておいでスピードで走り抜くか、インサイド又はハーフ・サイドにパスして、その間によいポジションをどり、球を返して貰つたりする方法をとるが、要するにかけ引の余地を作つておく事が必要である。

第二は味方のバックスは急場を切抜ける時、タッチライン中央の辺

に大きなクリアリングを出せば、必ずウイングがいて球を受取り、

センターリングに持ち込むだろう

と当にしているものだから、この期待を裏切らぬようポジションを占めていなければならない。

第三は反対側のウイングがセンターリングをしようとする瞬間には、タツチ・ライン近くに残つていないで、中へ切り込んでシュートする態勢をとるのえている事である。

更にWFの主な仕事としてはコーナー・キックがある。常に味方の望むところに一定したボールを落すように練習しなければならない。もう一つ、WFも防禦の際は相手を追わねばならぬ。近くのサイド・ハーフを追うのは大程IFの役目であるが、時にはWFもこれをしなければならない。特にF

Bが球を進める時には必ず追わなければならない。

〔要点〕

(1) センターリング、コーナーキックのエキスパートであれ。

(2) 常にゴールの角度を念頭に置いて、何時でもゴールに切り

込める用意をしている事。

(3) スローインを有効に使用して、球を有利に持ち込め。

(4) 不可能であると思われる狭い角度からシュートせず、真中の有利なポジションにいる味方にパスしてシュートさせよ。

(5) タツクルできる相手にむざむざと球を持たせず、追いかけてパスの余裕を持たせるな。
※ センターリング戦法のみでなく、時としてゴールラインに

没つてドリブルし、ゴールに近ずいてから、逆のIF或はCFにゴロでパスする方法も有利である。この場合特にオフサイドに気を付けること。

4. ウイング・ハーフ(サイド・ハーフ)

防禦についてまず考える事は、主として敵のIFをマークすべきか、WFをマークすべきかを味方のFBと協定する事である。けれどもWHの任務は防禦のみでなく攻撃にも大きな役割をもつているので、直接に相手をマークするのでなく積極的に攻撃にも参加しなければならない。敵IFをマークする方針の場合には中盤の球はすべて自己のものにし、中央突破を行い得るように構えている必要がある。相手IFが追つてこないよ

うな時には思い切つてペナルティエリヤ附近までドリブルし、強いねらいの良いシュートにしてもよい。けれどもWHの攻撃参加の主任務はフォワードに対するパスである。パスは正確である事、変化のある事が必要である。例えばIFへのパスはサイドのブツシュキツクを用いる。自分の側のウイングへのパスは内側に向つて走りながらアウトサイドで強くはじくようなパスを、反対側のウイング又はインナーへのパスは強い低い球をフロントパールのインサイドキツクで蹴るという風に。又パスは蹴る瞬間まで相手にどの方向にパスするかと解らないようにしなければならぬ。

攻撃について、スローインの攻撃も忘れることはできない。正確

に味方ブレイヤーの頭か足許に球を投げ、直ちに次の動作に移れるようにしてやらなければならない。遠くに投げる事、味方の動きに応じて穴に投げる事が必要である。そのためには常にWFやIFとスローインの戦術を研究しておかねばならない。

防禦について、忠実に相手をマークすることは勿論であるが、常に敵をサイドの方に追いつめる事を念頭においてプレイする必要がある。又タツクルの機会があればためらうことなく勇敢にタツクルを行う。しかし、中盤で滑り込むタツクルをして、完全に置き去りをくわぬように注意しなければならぬ。勿論、ゴール前では悪い切つてスライディング・タツクルを試みなければならない。

最後にWHは政防両面に参加しなければならないので、体力の養成には特に注意しなければならない。その上短距離のダッシュが早くなければならぬ。

「要点」

- (1) マークすべきIFから目をそらすな。
- (2) 防禦の際は相手をタツチラインに追いつめよ。
- (3) スローインの戦術を学べ。
- (4) 中盤の球のコントロールを習熟せよ。
- (5) 確実な球にタツクルする練習をせよ。
- (6) パス出たる状態の時に、無理に相手を抜こうとするな。
- (7) 球をドリブルして突込みすぎ逆襲されぬように注意せよ。

5. センター・ハーフ

CHの型は二通りある。一つは「スリーバック」防禦に於る「第三フルバック」の役目。もう一つは「ツウバック」防禦に於る「機動型」のプレイである。

第一の「第三フルバック」としてのCHの役目は、相手のCFをがつちりとマークして、これを食べい止めることである。CFの行くところには必ずついてゆき、常に一米位の距離の中にいるべきである。CHがCFから離れる時は、CFを捨て、もアタックしなければ得点されるという危急の際のみである。従つてこの型のCHは忍耐力を必要とし、身長が高く、強い良いヘッディングと、相手と競い合つて勝つ技術が要求される。FBとの協同については、二人の

FBがCHを中心に、フィールドを交互に前進後退する斜線を形成するように働かせる。WHとの協同については、相手のIFが球を持つて割り込んで来た時の処置を打合せておく必要がある。

第二の「機動型」のCHのプレイは防禦専門ではなく、攻撃にも参加してFWとのくさびの役を務めねばならぬ。即ちCHの主な責任はCFをマークする事であるがそれともかなり自由なマークの仕方ではFWにフォローしてFWを助ける時には相当離れても良いのである。FWを支援するのには内側の三人に出す低い速いパスと、WFへの大きく飛ばすパスの二つの方法を用いる。実際には攻撃計画を決定するのはCHであつて、風の方角・敵の防禦の弱点・味方のフ

ォワード内の強弱等を考慮に入てパスを送る。「機動型」CHの場合には、WHはWFをマークし、FBは中央のIFをマークするので、CHは中央とCFのマークの位置を走り廻る馬力が必要である。

「要点」

- (1) 常に不得手の側の技術を上達させる。
- (2) CFの味方のゴールの間に体を入れる事を忘れるな。
- (3) キック・タックル・ヘッディング練習を徹底して行え。
- (4) 相手のCFの癖を熟知せよ。
- (5) 絶対に球を持ち過ぎるな。
- (6) GKを一人ぼつちにしておくな。

※中学生は勿論、高校生程度の体力で、第二の型を完全にこなすのは無理であろう・栄光

は今、第一のスリーパツクの形式をどつているが、この方が防禦に力が入るので安全であらう。しかし、相手がさほど力を持たず、味方パツクスに余力があるようだつたら、適当に第二のツーパツクの形をどつた方が効果的だと思ふ。

6. フルパツク

F Bの任務はゴール前という危険な場所で、相手の攻撃を防ぐことである。その為にはどんな角度から来た球であつても、キツクスはヘッディングでクリアする能力を持たねばならぬし、勇敢にタツクルし又は巧妙に相手をタツチに追いつめて、他の者にゴールを守らせる余裕を与えなければならぬ。

「スリーパツク」と「ツーパツク」

ク型ではマークの相手が異なる事は既に述べた通りである。そのどちらの場合にも二人のF Bがゴールラインに平行に並んではいけない。ゲームの進行について交互に出たり戻つたりして、斜線を形成するべきである。これを怠るとF Bが二人共下りすぎてしまい、敵F Wは悠々と球を持つてコントリールし、それから攻撃にかゝることになり易い。F Bは決してドリブルしてはいけない。相手に追いつめられた時には、遠くW Fの方のタツチへ出すか、G Kにパツクパスせよ。仕方の無い時はコーナークツクを与えても止むを得ない。F Bのモットーは常に安全第一である。

ゴール前では決して球を停めてはならない。球を少しでも早く危

険地帯から遠ざけなければならぬ。そのためには、両足いずれでもよく蹴れるよう練習しておく事が必要である。スライディングタツクルはゴール前では行わねばならぬが、一旦失敗すると取返しがつかないから、慎重に最後の手段とせよ。G Kの援助はC Hと共にF Bの任務であつて、特にG Kがゴールから釣り出されたような時は、ゴールのカバーを忘れてはならない。

「要点」

- (1) 常に相手のウイングを潰せる範囲に在るように心掛ける。
- (2) キツクの原則を守れ。
- (3) 勇敢にタツクルせよ。
- (4) 軽卒に動かず、安全確実に。
- (5) 味方G Kの動きに心を留めよ。
- (6) 遠いタツクルに誘われるな。

(7) オクサイド・トラップ戦法を過信するな。

(8) 攻め込み過ぎ、逆襲の隙どり残されぬようにせよ。

(9) 球を持ちすぎるな。

(10) 内側には絶対に球を持ち込まれぬようマークせよ。

7. ゴール・キーパー

GKに必要な事は、球がどこに來るかを判断する勘とそれに応じた敏捷なポジションの取り方である。次に安全に球を手で防ぐ技術である。強いシュートを受けるときは腹を引いて衝撃を受け止め肘を体につけて球を胸か腹に拘え込むべきである。低い球の場合には手の後へ足をば持つてゆかねばならぬ。こうすれば球が濡れた時でも転つてゴールに入つてしまうのが防げる。敵フォワードのダツ

シュが早く、球を取ればチャージされるような時には、拳で叩き出した方がよい。必要以上に球をついて廻るブレイや、ぎりぎりのところで見事なセイビングをするブレイより、予測を鋭くし早く球を捉えて即座にクリアーするブレイの方が遙かに優れている。

GKのポジションはゴールライン上にへばりついているだけではない。敵のシュートの角が狭められるよう常に角度を考えながらポジションをとらなければならない。しかし無暗に早くゴールを飛び出してはいけない、絶対確実に球が取れる時、又は絶対絶命の時には迅速にゴールを飛び出すのである。GKはブレイスキックやドロップキックをできるだけ遠く、できるだけ正確に、マークされていない

味方に送らねばならぬ。そのためには高いパントキックよりも正確に短い球を蹴る方がよい。

〔要点〕

(1) 短く鋭い疾走、高いジャンプ、敏捷な体の動きを訓練せよ。

(2) 常に球の後に体をもつてゆけ。

(3) 常にシュートの角度を考え、正しいポジションをとる練習をせよ。

(4) あらゆる場合に安全第一にブレイする習慣をつけよ。

(5) 自信を持つてブレイせよ。然し大胆になりすぎてはいけない。

(6) スタンドブレイをしてはいけない。

(7) ゴールライン上のポジションに固執するな。

(8) 出来ようが出来まいが、決心を動揺させるな。

昭和 3 3 年度

全 成 績 表

中 学 校

年 月 日	相 手 校	試 合 名	得点	失点	勝 負
3 3.4.2 0	片 瀬 中	練習試合	7	0	○
6.1 4	千 代 中	夏季県大会 1 回戦	2	0	○
6.1 5	浦 島 丘 中	" 2	3	1	○
6.2 1	市 場 中	" 準決勝	2	1	○
6.2 2	藤 沢 一 中	" 決 勝	0	2	●
1 1.1 5	金 沢 中	練習試合	4	0	○
—	—	冬季県大会 1 回戦	—	—	不戦○
1 2.2 5	浦 島 丘 中	" 2	5	0	○
1 2.2 7	藤 沢 一 中	" 準決勝	2	1	○
"	白 山 中	" 決 勝	1	0	○

中 学 校 各 年 度 合 計

年度	試合数	勝	敗	引分	勝率(引分除)	総得点	試合平均	総失点	試合平均
2 8	1 0	3	2	5	0.6 0 0	1 4	1.4 0	9	0.9 0
2 9	1 2	9	2	1	0.8 1 8	4 1	3.4 2	5	0.4 2
3 0	1 4	1 1	2	1	0.8 4 6	3 6	2.5 7	1 1	0.7 9
3 1	1 1(3) 不戦	9(2)	1(1)	1	0.9 0 0	2 8	2.5 5	9	0.8 2
3 2	1 6(1)	1 3	2(1)	1	0.8 6 7	5 5	3.4 4	1 2	0.7 5
3 3	9(1)	8(1)	1	0	0.8 8 9	2 6	2.8 9	5	0.5 6
	7 2(5)	5 3(3)	1 0(2)	9	0.8 4 1	2 0 0	2.7 8	5 1	0.7 1

高 等 学 校

年 月 日	相 手 校	試 合 名	得点	失点	勝 負
3 3.5. 3	藤 沢 高	県下地区別リーグ戦	4	0	○
5. 5	相 洋 高	"	2	2	△
5.1 8	鎌 倉 学 園	"	0	1	●
5.2 5	県 立 鎌 倉	"	0	0	△
6.2 2	県 立 鎌 倉	関東大会予選1回戦	6	0	○
6.2 8	吉 田 島 農	" 2回戦	/	/	不戦●
7.3 1	上 智 大 学	親善試合	2	2	△
8.1 9	日 立 戸 塚	練習試合	1	1	△
8.2 3	多 摩 高	国体予選1回戦	8	0	○
8.2 4	茅ヶヶ 崎 高	" 2回戦	1	0	○
8.2 5	Y 校	" 3回戦	1	7	●
1 0.2 5	防 衛 大 二 軍	練習試合	4	0	○
1 1. 9	茅 ヶ 崎 高	インター杯予選1回戦	3	2	○
1 1.1 6	相 洋 高	" 2回選	4	0	○
1 1.2 3	県 立 鎌 倉 高	" 3回戦	6	0	○
1 1.2 9	慶 応 高	" 準決勝	2	0	○
1 1.3 0	鎌 倉 学 園	" 決 勝	0	2	●
3 4.2. 8	慶 応 高	新人戦1回戦	3	1	○
2.1 5	県 立 鎌 倉 高	" 2回戦	6	1	○
2.2 1	藤 沢 高	" 準々決勝	0	0	抽籤●

20試合 11勝5敗4引分

高 等 学 校 各 年 度 合 計

年数	試合数	勝	敗	引分	勝率(引分除)	総得点	試合平均	総失点	試合平均
2 6	1	0	1	0	0.0 0 0	0	0	1 1	1 1
2 7	9	2	6	1	0.2 5 0	7	0.8 8	2 0	2.2 2
2 8	15	8	5	2	0.6 1 5	42	2.8 0	1 8	1.2 0
2 9	19	14	4	1	0.7 7 7	65	3.4 2	2 3	1.2 1
3 0	16不戦	9	5	2	0.6 4 3	39	2.4 4	2 8	1.7 5
3 1	31(3)	22(3)	6	3	0.7 8 6	96	3.1 0	4 7	1.5 2
3 2	20(2)	13(2)	7	0	0.6 5 0	52	2.6 0	3 0	1.5 0
3 3	19(1)	11	4(1)	4	0.7 3 3	53	2.7 9	1 9	1.0 0
計	130(6)	79(5)	38(1)	13	0.6 7 5	354	2.7 6	196	1.5 1

0.1706
1725.00
1729

編集後記

☆やつと第五号ができ上つた。始めは三月一日に発行を予定していたのだが、記事が集まらないためのびのびになり、遅くなつてしまつた。この記事が集まらないと云う事は、創刊以来三年間の共通した苦勞だ。三年間には少し位進歩してもよいのだが。

☆それでも自発的に書いて持つて来て下さつた諸君が少しいたが、大変有難く感謝している。しかし

これとは全く反対にいくら頼んでも書いてくれない諸君もいた。DASHは蹴球部員の雑誌であり、面白くなるかならないか、又発展するかしないかは自発的に記事を書いてくれるか否かにかかつてい

るのである。少なくとも頼まれた諸君は快く引受け、誠意を持つて書いていただきたい。先輩諸兄は五割でまあまあという所。

☆今号では予算の關係上大巾に頁数をふやし、六〇頁から六五頁位に計画していたのだが、結局記事が集まらず、これだけになつてしまつた。そして、新企画として他校の蹴球部の活動をのせようと、二校ほど頼んでみたが、残念ながら書いてもらえなかつた。第六号では是非実現させたいと思つてゐる。

☆最後に、これから後DASHがますます発展していくよう、諸君の協力を強くお願いする。

「ダッシュ」一第五号一

昭和三四年三月二〇日印刷
昭和三四年三月二五日発行
発行所

栄光学園蹴球部

編集者 内山正樹

印刷所

横浜市金沢区泥亀町一

光有社

TEL (7) 九七四三番

I 非売品 I

編集長 内山正樹
編集員 林吉永
カット 田畑哲也